

## NiMoGa 特別賞

### 『しゃかん屋の孫娘』

鷺見京子

「おじいちゃんは、しゃかんです」

物心つくとは私は、祖父の職業のことを「しゃかん」と言っていた。それが、「左官」のことだと知るの小学校に入ってからのことである。周りの大人は「しゃかん屋の京子ちゃん」と私を呼んだ。こてやタイルを遊び道具にして、祖父にまわりつきながら幼い日を過ごした。

昭和30年代後半、戦後の混乱から抜け出した日本は、高度経済成長に向かい始め、岡山の田舎町の左官屋であった我が家にも活気が満ちていた。

明治43年生まれ祖父は、貧しい生活の中で弟を大学に行かせるため、14歳で左官見習いとして家を出た。一人前の左官になって間もなく農家の婿養子になった祖父は、農業はやっつけ仕事で、最低限のことしかしなかった。農業に精を出して欲しいという祖母の願いとはうらはらに、左官業をいっこうに辞めず、それどころか自分が親方になって、職人を7、8人雇って、見習いの青年まで家に住ませた。食卓を囲む人数は常に10人を超え、鯨肉の入ったカレーなどを賑やかに食べた記憶がある。祖父は酒に酔うと上機嫌で多弁になった。戦前多くの小学校に教育勅語を収めるコンクリート製の奉安殿を作ったことなどを感慨深げに話した。そして、66才で他界するまで、左官業一筋の人生を生きた。幼い私にとって、祖父はヒーローだった。鳶職のようなニッカボッカのズボンを穿き、脛にゲートルを巻いた、まさに仕事人といういで立ちの格好良さは格別だった。冬になると職人たちは、資材置き場の端で一斗缶に木切れを突っ込んで燃やし、暖を取った。仕事に出かける前の儀式のような集まりの輪の中に首を突っ込み、私は大人たちの話を聞いた。

「ラスが足らん」「吹き付けの方が……」「掛け落としが……」「川砂と赤土を……」

断片的だが、今でも左官業の専門用語が懐かしく思い出される。その中で、特に心に残っている用語が「モルタル」である。周囲の家が、焼き板の壁や土壁からモルタル外壁に変わろうとしていた時代である。折しも近所の裕福な家が、出回り始めたアルミサッシを使い、輝くようなモルタル外壁で新築した。バタと呼ぶ横板を渡した足場の上で鮮やかにこてを振るう祖父は眩しかった。左官仕上げのモルタル外壁は工期が長い。私は、飽きずに毎日眺めた。全くこての跡が残らない素晴らしい仕上げに驚き、自分もやってみたくづく思った。

何年かして我が家の台所を棟ごと改築することとなった。広い壁面に祖父と腕利き職人のヨッさんが貼りつき、こてを振るい始めた。自分の家だからいいだろうと高をくくり、私は、祖父に貰っていたこてを取り出した。さあ塗ろう！ と身構えた途端に祖父の大きな声が飛んできた。

「こりゃ！ モルタルは家の化粧じゃ！ お前が塗っちゃあならん！」

悔しくて仕方がなかったが、化粧と言われては仕方がなかった。半泣きで萎れていたら、後でこっそりヨッさんが、掃きだし窓の下にタイルを貼らせてくれた。小学校6年生の「作品」である。いい加減で、いい時代だった。

「左官屋や農業なんて、もう時代遅れじゃ。学校の先生になれ」両親からさんざん言われて中学、高校時代を過ごした。何となく地元の大学の教育学部を受験しよう決めていた高校3年の秋、祖父は私に言った。

「お前が男だったら、いい左官屋になったろう。うちの仕事をもっと大きくして、いっばしの土建屋の社長になっただろう。惜しいことじゃ」

「弟が二人もいるけど」

「あいつらは無理じゃ。度胸がねえから」

弟二人が知ったら、湯気を出して怒っただろう。髪型やスタイルばかり気にしていた18才の私には、褒められたのかくさされたのか、その時は分からなかった。しかし、今なら分かる。祖父の最大級の褒め言葉であったと。それから1か月後、秋も深まった11月の寒い日に祖父は脳卒中で急逝した。

その後私は、小学校の教員になり、結婚し、29歳でマイホームを建てた。見よう見まねで図面をひき、壁の工法も自分で考えた。屋根瓦は暗めのオレンジ色の釉薬。外見は洋風である。しかし、壁は木舞下地に土壁を塗り、真夏でも屋内がひんやりと感じられるようにした。そして、外壁はもちろんモルタルで仕上げた。ぬくもりがあり、意匠的で美しいモルタル壁は、左官職人としての祖父の誇りの壁であった。着工から入居まで1年以上かかり、周囲には呆れられたが、私は「しゃかん屋の孫娘」。譲れなかった。

継ぎ目のない真っ白なモルタル壁は朝日に輝いた。夫と3歳の娘、1歳の息子との暮らしは、モルタル壁に守られて始まった。

その後、小学校の教頭となり、定年退職までの3年間は校長として勤めた。学校の施設管理をする上で、左官屋で育ったことが大きく役立った。自分で出来そうな修繕は実家の工

具を借りてきて取り組んだ。業者が何かの工事で学校にやって来ると、必ず作業に付いて回った。さぞかし鬱陶しい女性校長であったろう。

ある日、校庭の花壇の周囲にレンガを重ねて枠を作り、目地をモルタルで塗り込んでいると、子どもたちが寄ってきて言った。

「校長先生って、職人さんみたい」

「うーん。職人さんなんだよ、心の中はね」

晴れ渡った青空。祖父がどこかで見ているような気がした。